

パパ随想

金子貞子

「たつみ」三十八号をパラパラ繰っていましたが、父の遺稿をみつける前になつかしい横文字の父の筆跡が目に入り、急ぎ文面に目を走らせました。そしてやっと本当に父を認めて下さる方、吉田先生に出合った喜びを感じました。沢山認めて下さる方は有っても半面の父でしか無く、悲しい思い出の方が多く心に残って居ります。これを書く気になったのは亡くなる少し前に頼まれた母の意志もあり、どんな形で書くかと迷っていた処へ丁度この吉田先生の記事に出会いましたので思い切って書くことにしました。



先づ題のパパは、当時（大正の

始め）我が家では父はハイカラさんでパパさんと呼んでいて、それが父に対して最も親しみを現す言葉となっていましたのでそのパパを取りました。

父はMIT（ボストンテクとかマサチューセッツ工科大学と呼ばれる）を卒業したことを大変誇りにして居り、丁度東郷元帥が海軍からの留学生として暫く御一緒だった話をよくしていました。真面目人間の父は、講義には休まず出席し相当苦労をしてこの大卒を卒業したのだと、証書を見せ乍ら述懐する様に話してくれました。

夢と希望と不安を胸に帰った父を当時の人達は金で買った卒業証と言い誰も受け入れる人がなく、また父が研究所を作ったと願った時も一瞥もされなかったと言ふ事で、その時分のやり切れない悲しさ、口惜しい気持ちのやり場を父の遺稿にある片意地と言つてもいい、「ひかえ目」を固持する事で貫き通したのだと思います。家庭内でも教育の差が父への理解を欠いて居たことが多々有った様でした。パッ子の私はそんな父の気持をよく理解出来、お蔭で父に

学ぶ事の大きかったことを今も感謝しています。晩年母もそのことを大変残念がり、よく私にこぼしていました。

吉田先生の文の中に出て来るセントラル・カレッジは大学ではなく、日本では高校で大学への足がかりに行つて居たものです。生涯を通じてよく勉強した人だったと思います。

新しい合理的な日用品で、これは便利だと思えばすぐ家庭に持ち込み母をよく面喰らわせていました。しかし中には大変重宝なものが沢山有りその様なものは大いに歓迎されていました。

よく新しい化学の事で父と議論し合うのも楽しい事でした。

また父は確に字を書くのは苦手だった様で、特に日本語は苦手で書けば万葉仮名の難かしいくずし字しか書けず、旅先からのめつたに出来ない珍らしい葉書等はいつも英文でその方が読みやすくわかりやすいでした。

父のサインがEではじまるのはIで始めるとアイワゾウと発音されて困ったあげく、Eにして解決したのでそうです。

小さい時から時々父について旅

をし、色々旅のエチケット、自分の事は自分でする、時刻表の見方、活用の仕方等を習い、少し大きくなるとそれを利用して時間の無駄なくどう汽車を乗り継いで旅を進めると良いか、その通り実行して後でそれに対する感想、批評等で旅の楽しみが幾倍にもなる様にしてくれた事は有難い事でした。

しかし父の旅への夢は家族揃って出掛ける事でした。色々の面で事情が許さなかった事は御承知の方も沢山あると思います。それでも唯一度だけ、姉は結婚して居て参加出来ませんでした。瀬戸内海を旅した事が有りました。その時の両親の満足でうれしそうな顔は今も昨日の様に思出します。

私達家の者が見ていた父はいつても口数の少い物静かで優しく思いやりのある学究の人であり、その半面祖母に似て陽気な事の好きな最も純粋なお人好し、アメリカ的なジョークが好きで浪花節で涙を流す様な人でした。外人のおつき合も多く、そのおしゃべりは全く日本人離れて見事なもので、色々な事に随分貢献していた様ですが、いつも縁の下力もちの様な立場でいた様な気がします。



前に書きました様に理解されない心の穴埋めに、若い頃は釣や射撃、猟やゴルフ等と、年とってからはゴルフや酒、競馬と私達にはどう仕様もない気の毒なむなしさ、自分でもいつもそのむなしさ淋しさをかみしめていた様です。後に母は、父が研究所を欲しが

った時、作って下さっていたら、又「私に力があれば……」とつくづく口惜しがっていました。

書き出せば切りのない事でまじめ難く、母が妻として生涯いだけ続けて居たこの気持を父に捧げてこの文を終りたいと思います。（鈴木岩蔵氏二女五八年二月記）

鈴木岩蔵殿

三十三回忌法要

今回会長鈴木治雄殿岩蔵殿の三十三回忌を迎えること、なり去る四月二日（土）（命日五八、四、四）ポートピアホテル内「招福楼」に於いて御一族相集りしめやかに御法要営まれ「斎」ともなれば施主鈴木会長から御丁寧なる御挨拶あり参会者の皆様からも御在世の忍び草を語り合つて時の過ぎるのをしばし忘れた。

岩蔵忌久々の野に

ある雲雀かな



「お家はん」

鈴木よねの思い出を

柳田義一氏に聞く

聞き手・野網敏一氏

— よねは商人妻としてどのようなお人柄でしたか。

柳田 そうですね。一口にいつて、かゆいところへ手の届く女性でしたね。

— なぜ「お家はん」と呼んでいたんですか。

柳田 私の父が番頭第一号で、続いて入店した傑物金子直吉が、大阪商人は女主人のことを「お家さん」と呼ぶからといったのが、後に「さん」が「はん」に変つてしまったのです。ご主人のことは大将と呼んでいました。

人生勉強の指針

— あなたは、お家はんにたいへん可愛いがられたそうですね。

柳田 砂糖商の辰巳商店は海岸通四丁目西村旅館を西に入った三

軒目山側で創業し、私の家はその東隣りでした。赤子の時から抱いてもらったり、風呂に入れてもらいました。物心がついたころはいつも旅行に連れて行かれ、まつたけ狩りや鶴飼いに同伴させられました。少し大きくなってからはよく叱られました。後で考えてみるとなるほどと思うことが多く、私の人生勉強の指針となりました。

— お家はんの日常生活はどうでしたか。

柳田 私が今でも感心していることは、個人商店時代のお家はんも、大商店の女主人となった時代のお家はんも、全くその生活は変わらず、終始一貫して同じつましい生活を続けられていました。日常生活も始末そのもので、お魚などめつたに食べず、いつもちりめんじやこに大根おろしがおかずでした。古布を一度に多量買いこんで毎日毎日ヒマさえあればさしこの雑巾づくりをけんめいでした。出来上った雑巾は店の用と、後には社員全員にやっていました。

幾百人の大家庭の女主人

— お家はんの鈴木商店での仕事ぶりは……。

柳田 商売のことはいつさい金子